

鈴木みどり基金 2014 年度
「環境メディア・リテラシー」

中間報告
ガブリエレ ハード 6.14.2014

研究動機：気候変動と世代間正義

One implication[of climate science so far] is the likelihood of intergenerational effects, with young people and future generations inheriting a situation in which grave consequences are assured, practically out of their control, but not of their doing. The possibility of such intergenerational injustice is not remote – it is at our doorstep now.

(Hansen et al. 2013、emphasis mine)

私は、鈴木みどりの指導の下、「オルタナティブ・メディア」や「メディア・リテラシー」をめぐる研究と実践に取り組み、それを近年まで続けていた。それが自分のキャリアだと信じていた。しかし、2011年に久しぶりにフィリピンを訪問した際、本来ホテルの前のビーチであったところは海に沈んでしまい、ヤシの木が倒れ始めている状況を目の当たりにした。多くの人がそうであるように、私も地球温暖化が急激に進んでいることは何となく知っているつもりだったが、現実を受け止めているわけではなかったようだ(Hamilton 2011)。その情景を見て瞬時はOh shit! moment（「もう駄目だ!」と実感する 瞬時）になった。初めて地球温暖化という受け入れ難い真実を受け止めることができた。それから「私はいったい何を、何のために研究してきたのか?」と自分の専門分野を問い直すことになった。



図1：Diniwid Beach (Madyaas Pen 2009)

人間活動をこのままで続ける「business as usual」(BAU) シナリオでは、地球平均温度は(20世紀前に比べて)2°C~4.8°C上がると気候科学は示している(IPCC 2013)。それにより、異常気象が増加し、生態系(ecosystems)や経済に大きな被害がでることが指摘されている(資料1参考)。その過程はすでに始まっており、「このまま」のシナリオ続けると想定を超えた極端な変化が起こり、

不可逆変化が起こってしまう (IPCC 2013)。それにより、現代文明が崩壊する可能性もあると考える学者もいる (Brown 2009)。しかも、それが今世紀中におこる可能性がないわけではない。

そのような状況下で、私は大学の教員として、今世紀後半まで生きる若い人たちを毎日相手にしている。その 21 世紀の人々が生きている間に急速な気候変動が起こりうる状況を、我々 20 世紀人が「遺産」として残してしまったことを考えると、胸がつまる想いである。今までは自分が若い人たちに対して偉そうに講義していたところがあったが、環境問題を世代間正義の問題であると実感したことで、自分の世代を含む 20 世紀人が恥ずかしく思えてならない。

一方、「このまま続ける」シナリオは、一つの選択肢しかないこともわかる。努力をすれば温暖化を完全に停止させることが叶わないとしても、少なくとも大規模で危機的な変動が起こらないように努力すること、例えば気温上昇を +2°C に抑える可能性はまだあるはずである。その可能性を残すことに人類が全面的に努力するべきであると気候学者は述べている (Hansen et al 2013)。また、時間的な猶予は既になく、2050 年までに（「温室効果ガスの大幅で、かつ持続的な削減」が必要である (IPCC 2013)）。

では、メディア・リテラシーの研究者・教育者・実践者として、何ができるのか？決して、私自身が「このまま続ける」状態にいることは許されないだろう。

研究計画の背景：環境の観点のないメディア・リテラシー、メディアの観点のない環境リテラシー

自然環境の破壊が危機的な展開に入ってきた現在、あらゆる分野の研究者の取り組みが求められている。メディア・スタディーズという広い分野では、「環境報道」や「環境・リスク・コミュニケーション」などの研究領域が昔からありながら、「生産側」の視点が強く、市民の役割はほぼ無視された。今なお、「メディア」を単なる「手段」や「媒体」として見る傾向が根強い (IGES 2001)。

それに対して、メディア・リテラシーという領域では市民の立場に立つこと、そしてその主体性と能動性が強調されてきた。メディアが偏在する社会では、メディアは我々が生きている社会環境を構成すると捉え、その中に生きるために必要な力が育つ仕組みを提示してきた (鈴木 2004)。しかし、社会環境をクローズアップしたにも関わらず、その基底にある自然環境についての意識は非常に薄い。メディア・リテラシーにおいても環境正義の観点が必要であろう、と指摘した研究者や実践者はあるもののそれはほんの一握りに過ぎないのが現状だ (Lopez 2012, Lasn 1999)。メディア・スタディーズ分野全体が環境問題に本格的に向き合うことは、今後の課題とすべきである

(Maxwell and Miller 2008)。

教育研究分野には、環境リテラシーという領域が存在する。その領域が注目していることは、自然環境の存在と環境問題への取り組みである。しかし、「自然」の捉え方や環境問題の提示はメディアが構成するものであるという視点がかけている。環境リテラシーでは「メディア」は単なる「環境コミュニケーションのための媒体」や「環境問題について学ぶ手段」のみである。

現在のところ、環境問題に取り組むためのメディア・リテラシーはまだ存在しておらず、メディア社会で通じる環境リテラシーもまだない。(御代川、関啓 2009、Goleman et al. 2012 などの環境教育の教科書を参照)。本プロジェクトでは、メディア・リテラシーと自然環境教育の接点を明確にした上で、「環境メディア・リテラシー」という新しい領域を発展させ、その理論と実践を結ぶ活動を行う。その結果をふまえ、環境メディア・リテラシーのための教材 (教科書) を出版する予定である。その教材を通して、特に地球温暖化と放射能汚染に直面している若い人々に、クリ

ディカルとクリエイティブ(critical and creative)に取り組める力を育てることを目指している。以下、その具体的な取り組みを紹介する。

アウトプットの計画：環境メディア・リテラシーが育つワークブック



図2：参考にする、メディア・リテラシーと環境リテラシーの文献。

現在、私は大学の社会学部の「放送通信論」、「インタミディエイト演習」や「情報メディア政策」などの授業を担当している。それぞれの授業において、可能な範囲で環境メディア・リテラシーのワークショップを行い、カリキュラムを作成している。さらに、市民むけのワークショップの開催にも協力している。その過程で、文献研究にもとづいた資料を開発している。元々鈴木みどり先生が監修した「Study Guide メディア・リテラシー」シリーズ（リベルタ出版）をベースにしていたが、少しずつ手を入れながら新しい方向に発展した「環境メディア・リテラシーが育つワークブック」（仮）の作成に取り組んでいる。

環境リテラシーを取り入れたメディア・リテラシーの学びとは

ワークブックの狙いは、市民の立場から、環境問題をメディア社会の文脈で読み解き、解決につながるコミュニケーションを自ら造り出す力が育つことである。中学生以上の学校教育現場、大学の様々な学部や市民講座などにおける生涯学習等で使用できるよう、内容はできるだけ様々なレベルに合わせたものにする。

メディア社会のグリーン化も目的に含まれる。そのため、「環境報道」や「環境について、どのようなコミュニケーションがあるか」をテーマにするだけでは不十分だと考えている。例えば、メディア・リテラシーのワークショップでは、教室や会議室で電子画面に向かって分析した後、グループワークでそれについて対話をすることは一般的だが、そうすることで「画面タイムを増やし、ネイチャータイムを減らす」ことになってしまう（ワークショップ参加者の発言）。できるだけ教室から出て、屋外で学ぶワークショップも取り入れなければならないだろう。なお、（鈴木みどり先生にも影響を与えたメディア学者）マーシャル・マックルーハンが指摘したように、メディア技術は視覚を延長することによって、ほかの感覚を麻痺させる効果がある（電子画面を用いた意図的な視覚と聴覚に訴える効果）。それに対して、環境リテラシーは五感を用いて実際の自分の環境を感じることができると強調してきた。

従って、環境メディア・リテラシーでは、まずは、メディアが作る「現実」の限界を知ること、そして、自分の経験との差に気づくことから始める。例えば、あるワークショップでは、例えば、あるワークショップでは、自分が「サメ」について「怖い」と思うのは、恐怖心を抱かせるBGMなどが含まれるサメの映像表現を「小さいころからみてきた」（参加者の発言）ことが関係しているからだ、という気づきが生じた。

なお、「水族館でサメがほかの魚やダイバーと一緒に平和に泳ぐ様子を見たこともあるが」それでも「サメが怖いと思うことに変わりはない」と話す参加者もいた。

そのようにして、メディアは我々が生き物に対して持つ印象に大きく左右する、そして自分の経験よりも大きな影響を与える力を持つ、などを参加者が話し合うことができる。

最後に、メディア・リテラシーで（主体性を認めながらも）「理性」（critical=「冷静に考える」こと）が重視されてきたことに対して、環境リテラシーでは「感情的」な考え方も大切にしてきたことをふまえたワークショップの中に、その感情をどのように実感し、語り合い、整理するかというのは、非常に難しい課題であるが、それに挑戦することが必要であろう。そのため、メディア・リテラシーの重要な概念（メディア言語、メディア効果論など）と環境リテラシーの概念（温暖化の科学的・政治的な課題など）を学ぶ機会を作りながら、話を展開させる方法を案内する。

章立てについて

ワークブックでは5章程を予定しており、それぞれの章ではテーマごとに4つワークショップを提示する。ワークショップの内容と活動にはそれぞれに特徴がある。その中には、鈴木型のメディア・リテラシーのワークショップに近いものと、独自の仕組みのものが含まれる。

本の構成は、「はじめに」の章で、まずメディア環境と自然環境の関連性について述べ、学び方、ワークショップの理念や環境メディア・リテラシーの基本概念を紹介する（講義的）。その他の章では、ワークショップのための最低限の背景を述べた上で、ワークショップのための分析シート、資料の紹介や対話の問いや活動の説明を中心とする（実習的）。それぞれの章に、テーマの紹介と話をより深いレベルに持っていくための資料やコラムもある。

取り上げるテーマは、まず「メディア社会が育てる自分とその「自然」感」についての気づきからはじめ、「ビデオゲームとネイチャーゲーム」の考察・体験・実践をし、メディアと自然体験の活動を入れる。次は、有名なキュメンタリー映画から無名な「市民記者」のビデオ、会社のプロモーションビデオなどをネットから検索し、それを自分の経験を考えた上で、分析するワークショップのやり方を紹介する

さらに、「報道」について考える章もあり、その中には原発や今な大きなメディアタブーである火力発電所について考えるワークショップ、リスクについて考える力を高める活動も含まれる。気候変動についての情報（例えば、科学ジャーナリズム、サミットジャーナリズム、社会運動のメディアなどの観点から）について学ぶワークショップも加える。

そして、環境広告をめぐるワークショップでは、「消費者として、環境に優しいことをやりたい」という気持ちは企業にどのように利用されているかを考える機会の作り方を提示する。また、メディアの内容から意識をメディアの「機械」的な側面に移動させ、メディア社会が生み出す環境破壊（電子ゴミや携帯やPCと不可分な鉱業）、またはそこから見えてくる開発問題＝環境正義の問題）を考えるワークショップもある。

最後の章に「脱メディア／入ネイチャー」の実践への誘いや環境問題への取り組みについて対話できる「オルタナティブ・メディア」についての章が並ぶ。最終章の次に、用語の説明と資料の頁を加える。

本の使い方としては、参加者の関心の経験に近い章・ワークショップだけを取りあげる方法も想定されている。必ずしも最初から最後まで使用しなくても十分に学べて、ワークショップは章の順に抛らずどこからはじめても差し支えない構成とする。

今後の取り組み（2015年度）

研究の側面では、大きな課題として、メディア・リテラシーの基本概念の「グリーン化」（自然環境をベースにした思想を取り入れること）が残っている。それに関して、Lopez (2012) の提案があるが、このプロジェクトの過程でより詳しい、分かりやすいものがないかと手探りをしてきた。今年度、それをしっかりと整理し、ネットワークで議論し、まとめていく予定である。なお、アウトプットを確実にできるよう、出版原稿を作るなどして、近い将来に「ワークブック」が出版されることをめざしている。

参考文献

- 鈴木みどり（編）2004 『Study Guide メディア・リテラシー 入門編』リベルタ出版
- Brown, Lester (2009) *Plan B 4.0 Mobilizing to save civilization*. W.W. Norton Publishers
- Goleman, Daniel, Bennett, Lisa, and Barlow, Zenobia (2012) *Eco Literate*, Jossey-Bass, San Francisco.
- Hamilton, Clive (2011) We are all climate change deniers <http://www.earthscan.co.uk/blog/post/Are-we-all-climate-deniers.aspx> (Accessed May 20, 2011)
- Hansen, James, Kharecha, Pushker Sato, Makiko et al (2013) Assessing “Dangerous Climate Change”: Required Reduction of Carbon Emissions to Protect Young People, Future Generations and Nature, *PLOS ONE* <http://arxiv.org/ftp/arxiv/papers/1110/1110.1365.pdf> [2014/12/15]
- IGES 2001 『環境メディア論』中央法規
- 御代川貴久夫、関啓子 2009 『環境教育を学ぶ人のために』世界思想社
- IPCC (2013), IPCC Fifth Assessment Report WG I Summary for Policy Makers, http://www.climatechange2013.org/images/report/WG1AR5_SPM_FINAL.pdf [2014/12/15]
- Lasn, Kalle (1999) *Culture Jam*. New York: Eagle Brook.
- Lopez, Antonio (2008) *Mediacology*, Peter Lang Publishing.
- Maxwell, Richard, and Miller, Toby (2008) Ecological Ethics and Media Technology. *International Journal of Communication* 2:331-353.
- Madyaas Pen (2009) Erosion at Dinivid Beach <http://madyaaspen.blogspot.com/2009/03/erosion-at-diniwid-beach-boracay.html> [2014/12/15]

二酸化炭素排出量の「これまで」と「これから」ギガトン[Gt]単位



